

## 第12回（2019年）昭和女子大学女性文化研究奨励賞 選考報告

昭和女子大学女性文化研究奨励賞選考委員会

### （1）選考経過および選考結果

「昭和女子大学女性文化研究奨励賞」は、卒業生を含む若手の昭和女子大学関係者に対し贈呈するものである。

第12回研究奨励賞は、2019年中に刊行された著作が対象であり、単行本1点が選考対象となった。第1回研究奨励賞選考委員会は2020年2月6日に開催され、選考対象について検討された。第2回目の選考委員会を2020年3月9日に開催し、歌川光一氏（聖路加国際大学大学院看護学研究科准教授・昭和女子大学初等教育学科非常勤講師）の、2019年3月20日に勁草書房から出版された『女子のたしなみと日本近代：音楽文化にみる「趣味」の受容』に「第12回 昭和女子大学女性文化研究奨励賞」を贈呈することに決定した。

### （2）受賞作の選考理由

本書は2016年12月に東京大学大学院教育学研究科より博士（教育学）の学位を取得された博士論文に、その後執筆した研究論文、書き下ろしを加え再構成されたものである。また、本書に関わる研究及び執筆は、2011年度から2020年度に亘る、日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費、11J10657）、科学研究費補助金（若手研究（B）、15K21357、若手研究、18K12233）の助成を受けて行われた研究に基づいている。本書は、序論に続く、第1章から第6章までの本論と補論によって構成されており、全248頁に参考文献・索引xxxv頁を含む。

本書の受賞理由は、第1に、「女子」を研究対象として、「趣味」を受容していった明治後期から大正期を中心に、歌川氏が言うところの、教育史・芸能史・芸術史等の研究分野の関心のずれ違いが生み出す死角に入っている「女子のたしなみ」の近代化のプロセスに着目し、教育文化史研究として意欲的かつ丹念に研究成果を導き出しており、女性文化研究の発展に寄与する研究であると判断された点にある。

第2に、「趣味」と教育、教養の内在的関連を文化史的に捉えなおし、「家の娘」としての「令嬢」／「少女」というジェンダー規範の違いによって必要とされるたしなみの対象の異同を論究し、「音楽のたしなみ像」を領域横断的な視点からの構築を試みている点が、高い独自性を示していると評価された。

第3に、さらに論を進め、理屈上は「たしなみ」が高じて生業となり得るところを、何故「たしなむ程度」にしか習得してはいけないとされたのかを「女子職業論」から検討している点である。これは、ジェンダー平等と男女共同参画社会形成に資する研究内容として現代的意義があり、本賞の趣旨に合致した内容である点である。

本書を女性文化研究奨励賞に決定するにあたり選考委員会が評価した、興味深い知見の一端を示したい。ひとつには、本書は、従来は家元制度論や芸道論等の視点から捉えられがちであった女子（女性）の稽古文化の歴史を、身体的修養・修養の歴史として描き、稽古文化にまつわる「花嫁修業」というイメージの成立過程について、音楽のたしなみを素材に論じている。この女性の稽古文化は、「私教育として特定の技芸を稽古して身につけようとする生活文化」を指す。日本における「趣味」の受容の問題が、都市新中間層の拡大に伴うモノとヒトをめぐる消費文化論およびヒトの能力観に直接関わる近代教育史の課題である点を浮上させた。

2つめに、本書は、女子の音楽のたしなみを考察対象として検討を行うことで、中上流階級の女子にとって、彼女たちに向けられたジェンダー規範の交錯によって「趣味」の和洋折衷化と結婚準備としての修養化が進行し、戦後にまで続く花嫁修業のイメージの原型を成立させたことを描き出した。このたしなみ像の変容と共に、女子にとって「結婚準備」の意味が曖昧であったことを指摘した。

3つめとして、雑誌メディアや礼法書等資料の分析を主軸として、丁寧かつ詳細に検討している点が興味深い。例えば、一般・男性向け絵双六と、女性向け雑誌付録絵双六における、楽器や音楽に関わるタイトルの割合を分析している。その結果、一般・男性向け絵双六では0.7%、女性向け雑誌絵双六は約31.1%を占めていることを示し、楽器や音楽に関わる93.8%が、女性向け雑誌付録であり、同時期において、楽器や音楽のイメージそれ自体がジェンダー化されていたことを明らかにした。この他、近代化の過程で私的領域として登場・普及した「家庭（Home）」と女子のたしなみとの関連性やテイストからホビーまで含む「趣味」の受容の問題と関連させた稽古文化の考察も注目に値する。

最後に、筆者自身が今後の課題として示している点に加えて、次の3点を挙げたい。

第1点目として、本書は、階層文化研究の課題として、「主に下層階級からの上昇移動の部分に焦点が当てられていたため、中上流階級を対象とした研究がほとんど行われてこなかった」点を挙げ、近代日本の階層形成期に着目している。それを踏まえたうえで、筆者は、都市新中間層を含む中上流階級女子の教養における伝統的教養の位置づけの再考および伝

統的教養とジェンダー規範の関係性の検討を今後の課題として示している。筆者は、「都市諸階層世帯の実支出の推移」を引用し、さらにブルデューを引いて「出身階層に結びついた差異がはっきりと現れてくる」という特質を示している。この点からも、時代背景の制約はあるとしても、下層の労働者階級の女性達がどのようにそのような文化的時間を獲得したのか、その教育・運動の過程等、都市新中間層以外の階層への着目もその後の「趣味」の変容・多様化からみて必要ではないか。「経済力や時間的余裕を前提とした」生活様式の変容過程における「趣味」へのより広範な視座による研究に期待したい。

第2点目は、趣味概念の変容の問題について、ジェンダー視点からさらに深化していただきたいと希望する。本書の随所に、男性の教養層の志向との比較が示されてはいるが、消費文化論、余暇・娯楽史の観点から、上述第1点目の階層への着目に加え、より詳細な性・年齢カテゴリー別の趣味概念の受容の異同等の検討に多いに期待する。

第3点目は、筆者も課題として示している、心がけとしてのたしなみが基本的には西洋化を果たしていった一方で、披露を通じた交際・社交像は西洋化を果たさなかったのは何故か、という行儀作法論からの視点も興味深い。

以上、この力作に続き、今後ますますの研究の発展を選考委員一同期待している。